

Nirātman と anātman

— マイトリ・ウパニシャッドの無我と原始仏教 —

村 上 真 完

一 はじめに

Maitri Upaniṣad (ミトリ *MU*) には nirātman (無我) の語が四回 (II. 4, VI. 28, VII. 4, VI. 20) ¹ nirātmakatva (無我なること、無我の境地) が三回 (VI. 20, VI. 21 (二回)) 用いられ、*nairātmyavāda* (無我論) (VII. 8) の語も見える。

ふたつ、このふたつ *MU* の nirātman の意味の考察にもとづいて、他方「無我」を説くといわれる仏教 (いまは特に原始仏教聖典) との比較を試み、両者の共通性ならびに相違を明らかにし、「無我」が印度思想史上において占める位置を考えるための手掛りとしてしようと思う。

二 *MU* の「無我」の要点

サマ *MU* 一・四には

śuddhaḥ pūṭaḥ śūnyah śānto 'prāṇo nirātma' nanto 'kṣayyah

Nirātman ʼv anātman (サ 十)

śhīraḥ śāśvato 'jah svatantraḥ (清浄、清潔、空無、寂靜、無生氣、無我、無辺、不壊、堅固、常住、不生、独立なる)

という、六・二八にも同文があり、七・四には始めの七語、六・三二には始めの四語 (以下を adī [等] といつて省略) が見られる。この一連の形容語の主語は、「身体をして精神あるものとなし、身体を發動せしむるもの」(二・四)、プルシヤ (二・五) とも呼ばれるが、六・三二によれば「アートマンとは何か」という問いに答えるものである。要するに ātman (我) の形容として nirātman (無我) がいわれている。六・二八にはヨーガ修行の境地における主体に関して言われている。

さらに六・二〇によれば、ヨーガの境地として、「ātman (我) によつて ātman (我) を見づ nirātman (無我) となる」といふ、nirātmakatva (無我なること、無我の境地) といふ解脱の特相といふ。六・二二には「無我なるために、楽・苦

を受けず、独存位を得る」という。

また二・七にはアートマンに関して「わがものという觀念のないうゝ niramatva」がいわれ、他方、「それは我である aham so」《これは我がものである mama idam》と考えるものは、アートマン(我)によつてアートマン(我を縛る)といひ、我執 abhinna を否定する(三・二・六・三〇)。我執を殺すことは「無我」となる前段階に述べられている(六・二八)。ここに、MU の「無我」は我執、わがものという觀念の否定を含むことが推定できる。

また一方「意の滅 manakṣaya によつて無我になる」(六・二〇)と云ふ「意寂滅の境地 manahśāntipada」(六・三四)、「無意識状態 amanibhāva」(同)を高い境地とし、「無心 acita」(六・一九)、「心の寂滅」(六・三四)を説き、いわば、心のはたらきの滅をめざしている。「無我」もまたその方向で理解すべきものと考ええる。

MU 七・八には無我論 nairātmyavāda に対する非難も見られる(これは仏教に対する非難と考えられる)とはいへ、MU が「無我」に高い位置を与えていることが認められる。

MU の「無我 nirātman」説は『インナーラタ』(Critical ed. 3. 203. 38; 12. 242. 10; 12. 192. 122) にも影響を与えていると指摘されている。また「わがものという觀念のなう nirama」の語はマハーバータをはじめ、多くの例が指摘さ

れている(PW)。このように MU の「無我」の思弁も必ずしも孤立したものではないようである。

三 仏教との共通点

古来無我を説くといわれる仏教と MU の「無我」説とを比較してみると、まず共通点が指摘できる。

(a) MU の無我はヨーガ修行の境地における主体に関していわれ、無我なることは解脱の特相(六・二〇)、独存位(六・二二)といわれるのを見た。これに對比される仏教の無我説においても、非我(無我)の觀察に続いて、解脱、解脱知見がいわれる。また後のいわゆる三法印においても、無我の次には涅槃寂静(すなわち解脱、さとり境地)が言われており、無我が解脱(涅槃)に深く関わりあつてることが示唆されている。

(b) いわゆる『無我相經』を見ると、色等(五蘊)の無常と苦を觀察、確認した後に

しかるにおよそ無常、苦にして変異の法(性)あるものを、《これはわがものである etam mama》、《私はこれである eso 'ham asmi'》《これは私の我である eso me attā》と見ることは適當である。(S. III. p. 67=Vin. I. p. 14)

と問ふ「否」という答えを引き出している。これに対して MU においては物質的要素から成る原素我 bhūtātman につ

らいつ「*faham so, mama idam* と考えるものは、我^{アタシ}によつて我^{アタシ}を縛る」(三・一一^六・三〇)という文が対比される。

『無我相経』に *etam mama, eso 'ham asmi, eso me attā* (Skt. *etan mama, eṣo 'ham asmi, eṣa ātma*) と^(c)いう初めの二句は、*MU* にほぼ同文を見出せるといえよう。ともに束縛として否定しようとする意図も同様である。

MU 三・一二及び六・三〇において、我が我を縛ることを、「鳥が網に(縛られる)のに喩えている。この比喩は仏教においても『鳥が網に(縛られた)ように凡人は欲望に縛せられてゐる』(S. I. p. 44)という。

なお *MU* 三・一二には原素我とは区別された「不死なるアトマン」は蓮花の葉における水滴にたとえられる (*bindur iva puṣkāra iti*)。同じ比喩は仏教においては聖者 (*muni*) につづ (*Sn. 812*)、比丘につづ (*Sn. 392*) うわれてゐる。

MU の無我説におづつ「わがものという観念のないこと *nirnamatva*」(一・二)及び、我執 (*abhimāna*) を離れることが説かれている(六・二八)。そして我執あることが、我の束縛とされている(三・一二・六・三〇)。仏教におづつ「わがものという執着(観念)」(*mamāyita Sn. 119, 466, 805, 809, 950, 1056, etc., mamatta Sn. 871, 872, 951, 806 etc.*) 及び慢心 (*maṇa Sn. 4, 132, 328, 370, 469 494, 537, 631, 786, 889, 943 etc.*) を否定する。そして「わがものという観念(執着)のなす (*amama*

Sn. 220, 469, 494, 495, 777 etc.) のが理想とされる。

さきに見た『無我相経』においても、色等五蘊の無常、苦、非我(無我)の觀察に続いて、「色」等を厭離する *nibbindati*』と^(c)いふ、続いて、解脱、解脱知見を得るとする。色等五蘊を厭離するというのは、さきにみた、わがものという観念をはなれることにほかならないであらう。

(c) 『無我相経』には *MU* とは異なつて、ヨーガの語もなく、瞑想を意味する語も用いられていない。しかし、色等の無常、苦、非我の觀察、厭離、解脱、解脱知見という過程には、深い省察があるものと考えられる。無常、苦というのは、深い省察にもとづく所与の体験である場合があつても、非我の觀察とそれに続く厭離とは、一種の瞑想によつて深められて体験されて、やがて解脱、解脱知見に達するものと考えられる。

これに関連して、無常想 *aniccasañña* とならんで、非我(無我)想 *anatta-sañña* を修習する *bhāvehi* など^(d)が知られてゐる (A I. p. 41, III. 447, IV. 24=D. II. 79)。想も修習も、ともに瞑想に関する用語である。

ここに *MU* の無我がヨーガに関して説かれていることと一致する点が考えられる。そしてその無我が解脱に関することであることも、*MU* と仏教(『無我相経』)とに共通することは、さきにも触れた通りである。

(d) 次に *MU* におづつはアトマンの形容として無我が

説かれているのを見た。これに対応する説は原始仏教の中にはないが、*Mahāyāna-Sūtrālamkāra* (『大乘莊嚴經論』) 九・二三偈には

清淨なる空性において、無我なる最上我を得たるが故に *nirāt-myāmāgālabhataḥ* ⁽³⁾ 諸仏は清淨なる我を得たものであるから、我の大我性 *ātmanahātmatā* に達している。

という。この偈は『究竟一乘宝性論』卷三(大31 八二九下)や『仏性論』卷二(大31 七九八下)にも引かれる。

また大乘の『大般涅槃經』には種々に大我を説くが、その中に、「涅槃無我。大自在故名爲『大我』」(大12 五〇二下、七四六中)とも言ふ。ともに無我を理由として大我が説かれているのである。

ここでは無我なる我が説かれているわけで、*MU*の無我説に対応する思弁と考えられるが、原始仏教にはない説である。

四 原始仏教との相違

以上において *MU* と仏教の無我説に関して共通する点を求めて見た。しかし、子細に見るならば、上記のことがらについてだけでも、重要な相違がある。ここに相違を明らかにする要がある。

(A) まず上記のことがらについて検討すると、三(b)におい

て、*MU* の *nirmamatva* と仏教の *anama* を対比したが、語形は明らかにちがう。*nirmamatva* に相当するパーリ語は原始仏教聖典に知られていないようである。*abhinana* についても同様であろう。

MU において「わがものという觀念のないこと *nirmamatva*」は、「未顕現、微細、不可見、不可取なること」に次いで、アートマンに関していわれている(二・七)のに対して、原始仏教聖典『スッタニパータ *Sutta-Nipata*』(*Sn* と略記)などに説かれる *anama* (わがものという觀念〔執着〕のない)は、聖者 *muni* (*Sn* 220)、『婆羅門』、如来 (*Sn* 469)、『供養するべき人』(*Sn* 494) に関していわれ、『わがものという觀念なく行ふ』(*anamo careyya*) (*Sn* 777) と説かれるのである。ここでは不可見なる内在的なアートマンを問題とはしていない。もっぱら修行者の実践に関することとされているのである。

またさきに閑説した「蓮花の葉における水滴」の比喩にしても、*MU* においては「不死なるアートマン」について言われるのであるが、仏教(*Sn*)では聖者や比丘について言うのであつて、アートマンについてではない。

MU はアートマンを論ずることを主とし、修行者の実践生活については比較的に語ることが少ないのに対して、原始仏教(*Sn* 等)はもっぱら実践を問題として、不可取なるアートマンを無視するようである。

他方、行為や責任の主体、修行の主体として、他とは区別される「我」を重んじ、「我を護るべし」(Dh 157)「我を依りどころ(州)として住せ」(D II, p. 100)等とう。このような実践の主体としてのアートマンについてはMUは殆ど注意を払わないようだ。

(B) MUにおいて無我 nirāman といわれたのはアートマンに外ならないと考えられたが、原始仏教ではそのように考えられる記述はない。

さきに触れた『無我相経』では、色・受・想・行・識の(五蘊)無常、苦、非我(無我)をいうのであり、これに類する記述は『蘊相応 Khanda-Samyutta』(S. vol. III)に多いのである。他方、眼・耳・鼻・舌・身・意あるいは色・声・香・味・触・法について無常・苦・非我(無我)を説く経は『六入相応 Salayatana-Samyutta』(S. vol. IV)に多い。ここではわれわれの存在に関わる一切のものを、要素または領域に分析して、その一々が我ではないことを示すのである。

MU には「不死のアートマン」と「原素我」とを区別するなど、分析的な考え方はあるが、すべての存在を諸要素に分析して、その一々が「我」でない¹と示す意図はみられない。仏教では先に見たように、無常、苦、非我と続けるのであるが、MU において無我 nirāman と併列される語の中には

無常も苦も見られない。²かえって常住 sasvata とみられている。なお、漢訳(雜阿含)の系統では、無常、苦、空、非我³というが、空 śūnya は MU でも無我と並んであげられていたものである。

(C) 『無我相経』は『比丘たちよ、色は非我である rūpaṃ bhikkhave anattā』と言いつつ始まる。ここは anattan (非我なる、我ではない)の語が用いられている。これに相当するサンスクリット文では rūpaṃ bhikṣavo 'nātmā となり、anātmān の語を用いながら、MU に使われている nirāman を用いていない(CPS 15. 2, *MVasta* III, p. 335)。⁴五蘊の非我のみならず、眼等の六内処、色等の六外処につづいて nirāman に相当する語を用いず anattan を用いる。また諸法無我、一切法無我といわれる場合には sabbe dhammā anattā (Dh 279 = Th 1. 678; S III, p. 132, M 1. p. 228), sarvadharmā anātmānaḥ (Bernhard, *Udanavarga* XII. 8) となり、anattan, anātmān を用いている。なお後で nirātmaka, nairāmya などの語を用いる書にも、この場合には sarvadharmā anātmānaḥ のように anātmān を用いる。⁵

nirāman と相当するバーリ語は niratta(n) と考えられ、The Pali Text Society's *Pali-English Dictionary* にも Niratta¹ として掲げる。その典拠となるのは Sn 787, 858, 919 とその註釈である。Sn 787 では

近づくものはまことに諸法(事)について論難をうける。近づかないものに(人は)何をもちて論難を語ろうか。何となれば、彼には取得されたものも放棄されたものなく *attam nirattam na hi tassa attāhi* 彼はまことにここにおいて、一切の偏見を掃い去つたからだ。

という。水野弘元博士(『南伝大蔵経』第二十四卷)は *attam nirattam* を「我も非我も」と訳しており、それなりに意味あるものと考ええるが、多くの訳者は別に見ている。右に試みた訳のように見ても意味は通ると考えられる。

Sn 八五八には

彼には子供も家畜も田畑も土地もない。彼には取得されたものも放棄されたものも認められなく。 *attam vā pi nirattam vā na tasmim upalabbhati*

Sn 九一九には

比丘はただ内心平静であるべし。他に寂靜^{śānta}を求めるな。内心平静なるものには、取得(固執)されたものはない。どうして放棄(拒否)されたものがあろうか。 *n'atthi attā (Nā¹ ni attam), kutto nirattam vā*

という。水野訳ではいずれも、我、非我とあるが、必ずしもその必要がないと考えられる。*Sn* 1098 には *ugghatam nirattam vā* (取りあげられたものあるいは放棄されたもの)とあつて、ここでは「無我」の意に解する余地はない。

ついで前掲の詩句に対する *Mahāniddeśa* (*Nā¹*と略) p. 82=

248=352 には

attā (p. 352, attan) (取得された、または我?) という常見 *sa-sasadiṭṭhi* がなく、*niratta* (p. 352, nirattan) (放棄された、または無我?) という断見 *ucchedadiṭṭhi* がなく。 *attā* (取得された) という執せられたもの *gahita* もなく、*nirattā* (放棄された) という脱すべきもの *muñciyabba* もなく。凡そ執せられたものがある (p. 248=352, なし) 人には脱すべきものがある (p. 248=352, なし)。凡そ脱すべきものがある (p. 248, なし) 人には執せられたものがある (p. 248, なし)。阿羅漢は執取・脱却を *gahaṇamuñcaṇaṇ* 超越し、増大・減少を離れている 云々

と云う。*Sn* の註 *Paramathajotika* II. 2 p. 523 (on *Sn* 787) には

彼には実に我見あるいは断見もなく。執取・脱却 *gahaṇamuñcaṇa* あるいは *atta-niratta* (取得・放棄) と称するものもなく 云々

という。これは前の *Nā¹* をうけたものであろう。さて右においづ、*attā, niratta* は我、無我であると断定しているわけではないが、常見・断見に当っているから、我、無我と考えられるのであろうか。しかし *Nā¹* でも *Sn* 註でも、執取脱却 *gahaṇamuñcaṇa* とあつて、すべて *Nā¹* には *gahita* (執せられた) と *muñciyabba* (脱すべき) とに当っているところを見れば、我、無我の解釈を全面的にとつてゐるものとは考えられない。むしろ *niratta* だけ *Skt. nirasta* (放棄された) に相当す

ると見たもののように考えられる。

以上 *Sn* の *niratta* を無我の意にとる必要が必ずしもないことを見た。このほかに *niāman* にあたる語をあげる。パー資料があることは指摘されていない。無我説に關して用いられるのは、原始仏教聖典では、⁽⁶⁾ もつばら *anattān*, *anātman* である。

(D) *nirātman* を「無我なる」と訳し、*anātman* (*anattān*) を「非我(なる)」と訳してきたが、両者は同意語であるとも疑われるので検討してみよう。色等五蘊の一々が *anātman* であるという場合は、存在を分析して一々が「我ではない」というものと解しうる。多くの経が五蘊あるいは六処に分析して示したのも、一々「我でない」ことを示すためのように考えられる。これによつて結局「我がない」と示唆されるわけである。また色等五蘊の一々について、「これはわがものびなく *netam mama*, *nattaṃ nanaṃ* 私はこれではなく *n'eso 'haṃ asmi*, *na'eso 'haṃ asmi'* これは私の我ではない *na meso attā*, *na'esa me attā*」(*S* III. p. 68=*Vin.* I. p. 14; *CPS* 15. 16) と⁽⁷⁾ とうのを見つゝ「我ではない」と解される。*anātman* も同じく解してよいと考えられる。漢訳雜阿含には無我とならんで非我の訳語が用いられている。その非我は *anāman* の訳と考えられる。

前記の『無我相経』の始めに相当するチベット訳において

Nirātman へ anātman (村 上)

は *dge-slon-dag gzugs ni bdag ma yin-no* と⁽⁸⁾ *anātman* を「我ではない *bdag ma yin*」と理解していたことがわかる。

また、ちなみに *Yogasūtra* II. 5 に對する *Vyāsaśāstra*, あらうは *Brahmasūtra-Sāṅkharabhasya* 冒頭などでは *anātman* は「ブートマンではない(もつ)」の意に用いられている。

以上のような点から、仏教において、*anātman* は「我ではない」というのが、原意であつたらうと考えるのである。⁽⁹⁾ しかし、「我がない」という解釈も、ほとんど行われ、*nirātman*, *nairātmya* (無我) という語も後には用いられるようになったと考えられる。

五 結 び

以上、*MU* と原始仏教の無我説について比較を試みた結果、共通する如き点もありながら、よく見ると相違が認められた。とくに、*MU* の用いる *nirātman* を原始仏教では用いず、*anātman* を用いたこと、後者は「我ではない」が原意で、前者の「無我なる」とは本来異なることを推定しようとした。ここに、*MU* の無我が原始仏教の用語の単なる借用とは考えがたいと思うのである。⁽¹⁰⁾

仏教における我、無我の原意と発展、及びそれと *MU* との

関係など、残された問題は多い。それについては他の機会に俟ちたい。

- 1 『文化』第34巻第1号(昭和45年)にならび、各々詳しく論ずる。なお本稿における略号は主として The Pali Text Society's *Pali-English Dictionary* pp. XII-XIV に従ふ。
 - 2 E. Waldschmidt, *Das Catuṣparisatstra* (以下 CPS) 15, 8f II. S. 166, III. S. 449; cf. *Avadāncātaka* (Av. Ś) II. p. 169,
 - 3 長尾雅人 *Index to the Mahāyāna-Sūtrāṅkara* I, p. xiii の訂正 (Tib, Shīramati に従ふ) に従ふ。
 - 4 大正一十『法華』第廿中。(非我をせず無我を説く)と大正一十『法華』第廿中。F. Bernhard, *Udānavarga* (Sanskrittexte aus den Turfanfunden X), Göttingen, 1965, xii. 5-8. 非我、苦、空、非我(無我)と続けつゝる。出曜経、法集要頌経も同じ(大四、六二中下、六三上中)。
 - 5 *Bodhisattvabhūmi* p. 277, *Mahāyāna-Sūtrāṅkara* p. 149 (XVIII. 80)
 - 6 サハニマニヤン(国令)資料に上掲のものと Louis de la Vallée Poussin, Documents Sanscrits de la Seconde Collection, Fragments du Samyuktāgama, JRAS 1913, pp. 576-7 にある。
 - 7 *Mahāvastu* III. p. 336 (但し第三句 na etad ātmā), *Avadāncātaka* II. p. 169 にも同文がある。(CPS S. 166 に na iṣa ma ātmā とあるが S. 449 の文の上に掲げた)
- なお五蘊の一々の非我(無我)について
『色をば我とは見ず』(na rūpam atītaṃ samanupassati) 我は色を有するを(見)ず (na rūpavantaṃ vā attānaṃ) 我の中に色があるを(見)ず (na attāni vā rūpaṃ) 母の中に我があるを(見)ず (na rūpasmiṃ vā attānaṃ) 我は母の(āhaṃ rūpaṃ) 母は母の(āhaṃ mama rūpaṃ) するを(āhaṃ mama rūpaṃ) するを(āhaṃ mama rūpaṃ) cf. S III. pp. 17, 57, M. I. p. 300, III. p. 18 (とせず āhaṃ rūpaṃ 以下をならう)
- とうとう、色等五蘊と我との関係を四種に分けて考察している場合がある。これはさきの『無我相経』の場合よりも論理的に進んだ見方と考えられる。
- 8 E. Waldschmidt, CPS S. 163. これはチヤン、訳の律の破僧事(『影印北京版西藏大藏経』第42巻No. 1030. 17, p. 45a¹ (fol. 42a¹) にある。
 - 9 漢訳における「無我」の訳語もこれを示している。チヤン、訳に「例えは Udānavarga XII. 8 (H. Beckh 刊本) に bhū byed thams-cad bdag med-par... (一切諸行は無我である) とある。
 - 10 *Vajracchedika Prajñāpāramitā* (ed. by E. Conze) 17f, 17h
 - 11 *Mahāvastu* II. p. 363⁸, *Laṭīta Vistara* (ed. by Lefmann) p. 176⁹, *Bodhisattvabhūmi* p. 280 etc.
 - 12 本稿に三(三)に触れたものに、大乘仏教に MU と対比すべき思想がみられることは注意すべきであらう。MU と後の仏教との関係については他日に期したう。